

こころのうた

じゅしん

永遠少年症候群

こちら 永遠少年症候群患者
応答をお願いします

見えることのない友へ
永遠に画面の向こう側で
それでも交わす言葉が
さようならでないのなら
それは
幸せなことでしょう

この鼓膜を震わせたことのない友へ
直接に聞く声が
さよならだとしても
広い世界であなたに出会えたのは
幸せなことでしょう

システムオールグリーン
こちら 永遠少年症候群患者
あなたは幸せですか？
応答をお願いします

僕は知っている

僕は知っている
神様なんていないのさ
サンタクロースも同様
救いようのない人間が
救いを求めて作った幻想
けれど そう
夢を見るのは自由だ
夢ってのは甘い
甘くてどっぷり浸かってしまう
麻薬よりタチが悪い希望

僕は知っている
幻想や希望に縋って
重くなった大人は
飛べないのさ

溺れる者が掴むもの

溺れる者が掴むのは水ばかりさ
助けなんてくるわけないよ
みんな
君に引摺り込まれるのを恐れてる
ヒーローにはなりたいけど
犠牲者にはなりたくない
そんな
命懸けのヒーローなんて
なりたくない連中ばかりさ
地位も名誉も金も
命あつての物種だからね
もがくのを止めてごらん
できたらの話だけど
君が大人しく助けられるって知ったら
何人だって助けは現れる
けれどそれも
もがくのを止めた君が
それまで
生きていられたら話だけどね

幸せ

僕の記憶を甘く溶かして
君のものだけ取り出すんだ
そうしたら
きっと幸せだと思わないか？
僕の世界が君で溢れて
幸せなはずだ

嗚呼 辿り着けない幸せ
想像だからこそその 幸せ

自己満世界

ちっぽけな僕の世界とは
君と僕とが生きてる
この空間のこと

僕には
目の前で苦しんでる友人と
どこかで苦しんでる知らない人を
どちらも助けるなんて
到底ムリ

世界を世界と言える
でっかい人間なんて
スーパーマンくらいのもんだよ
それ以外の人が
世界中の人を助けるなんて
自己満なのさ

スーパーマン

君を救おうなんて

そんな大役背負っちゃいないさ

僕はただ

君が好きなだけ

虚構世界

わかってるよ

この世界は虚構にすぎない

わかりきったことだろう

それでも信じるというあの子を

馬鹿らしく思えても

羨ましいと感じる

つまりはみんな信じたいんだ

この世界は真実で

生きてるだけで正解だって

だけど考えてみてよ

僕の質問はいつも反古

答えたくないんだ

答えがノーなら

世界はやっぱり虚構だからさ

ねえ 生きてるのがって楽しい？

時々

時々 深呼吸

そんな時は大抵

僕は呼吸を忘れていたんだ

時々 深呼吸

そんな時は大抵

呼吸の仕方を忘れていたんだ

胸が苦しくなって

僕はようやく気付くんだ

時々 あー と言ってみる

声が出るか不安になるんだ

そんな時は大抵

僕は独りで歩いている

時々 あー と言ってみる

同時に深い溜め息をつく

そんな時は大抵

誰かと話したいな

君だったら最高だななんて

考えてるんだ

息

苦しい 苦しい
全て人のせいにして
誰かに泣き付けば楽でしょう

"苦しいから助けて"
"あの人がいじめるのよ"
"首を絞めるの"
"息ができないのよ"
泣いていたら誰かが慰めてくれるわ

そうよ だけど
息を止めていたのは
他でもない私だった

不公平

君にとって

生きにくい世の中なら

きっと

君にとって

逝きにくい世の中だと思う

ああ 世界はいつだって不公平

僕は君が傷付くのを

見ていることしかできない

ううん できなかった

今は

気付くことさえできないんだ

理不尽

そういえば そうだった
世界は
理不尽なんだった
最近は幸せで
そんなことも忘れていた

似て非なるもの

求めることは
理解することと
似ている気がする
同じ目線でいたいからだ
なのに
理解するためには
求めてはいけない
同じ目線にいるために

似て対極にあるもの

恋と愛は

似ている気がする

どちらも1対1だからだ

けれど

前者は求めるもので

後者は与えるもの

それは大きな隔たりとなって

恋を押し潰す

勘違いしてはいけない

2つは似ているようで対極にあるのだ

夢

その時
透明な夢は
心の奥に引っ込んだ
ガラスの心は
考える事をやめた

「現実を見なさい」って言われた
それは多分
「夢を見るな」ということ
あたしから
夢を取り上げたら何が残るだろう？
何も残らない気がする
勉強する理由がなくなる
もしかしたら
生きる目的も
なくなるかもしれない
それは
全ての生き物から
空気を水を
ひよっとしたら愛を
取り上げるような物だから

あたし 夢を追いかけてたい
それはきっと
明日への架け橋になるから

夢

僕の夢

潰れゆく夢

ああ 自分の現実に

追いつけないんだ

違う

現実が追いつけないんだ

寂れた現実

止まらない夢

虹色の夢

夢は現実に相反する

終わらせたい現実

鈍色の毎日

現実は夢に反比例する

需要と供給の均衡点

ただ不幸せじゃなければ

幸せとは限らずとも

いいんじゃないだろうか

最近思う

寂れた現実に似合う寂れた願い

確かなもの

僕は
気持ちを伝えるとか
心を開くとかいうことに
臆病だけど
けれど確かに感じる
君からの想い
ありがとうの気持ちは
いつか
君が僕に 別れを告げた時に

しあわせさがし

幸せを探して
僕らは生きる
泣きながら生まれ
笑いながら死ねたら
最高じゃないか
その為に
僕らは生きる
幸せを集めてね

みつけたしあわせ

幸せの在処 必死に探して
手が汚れて
泥に塗れて
君を抱き締められない
嗚呼 幸せは君だったのか

空

空は繋がってる
けれど
僕が見上げる空と
君が見上げる空は
遠く 遠い
星や雲を指差して
語ることもなんてできないし
天気だって違うかも
空よりも何よりも
心が繋がってれば
大丈夫
また会おう

さよならの手紙

さよならの手紙は
いつも居なくなってから届くのよ
声が届かないその時になって
まだ届く
まだ今は
でもねでも
最悪の事態はいつも
想定しておくにこしたことはない
けれど最悪の事態はいつだって想定外
注意の喚起を呼び掛けて
忘れた頃に大惨事

料金不足

わたしがいきるいみはある？

理由をくれたのはあなた

わたしがいまいるいみはある？

答えがないのは私

——さよならの手紙は

行き場のない心を抱えて

——いつも

けれど私は独りじゃない

——居なくなってから届くのよ

さよならの手紙に

孤独という切手が貼れない

同情の消印も押されない

あなたがいる限り

手紙は返ってくるわ

夢うつつ

夢うつつ
君と覚えし
闇の淵

散歩に見ゆ
餓愛なる月

四季

長き冬 青き杏の 実の如し
空に舞ひしは 桜の花弁
落涙の 雪解け水と 流れ行く
去りし思ひ出 花の雲かな

長き冬 若き石榴の 実の如し
空に散りしは 花火の美麗
落涙が 日向水をも 揺らしつる
去りし思ひ出 夕虹の日よ

長き冬 幼き蜜柑の 実の如し
空を行きしは 翳雲と青
落涙が 落し水より 早く行く
去りし思ひ出 天の川の夜

長き冬 落ちぬ椿の 花のよう
空に響きし 夜神楽の音
落涙が 凍りし折りの 玉霰
去りし思ひ出 侘助の君

長き冬 燃えぬ姿は 七竈
燻ぶるばかりの 恋心なり

願

幸せとか
生きてる意味とか
そんなもの
答えなんて転がってなくて

寂しい理由とか
死にたい理由とか
そんな下らない答えは簡単で

僕が生きる道を照らすのが
僕自身だと言うのなら
幸せなんかから
目を背けているのは僕自身

君がいたら幸せ
君がいなかったら不幸のどん底
だからといって
君に出会わなかったら良かった
なんて
そんな馬鹿なこと思わないさ
君がくれた幸せは
寂しさよりも
ずっとずっと温かいんだから

君が幸せだといいなあ

負けない花

僕はきっと
大切なものを守るために
たたかいにいくという君を
見送るだろう
僕は援護射撃しかできないからさ
一緒には戦えないんだ
でも でもね
君の帰りを待ってるよ
信じて待ってる
君が武器を捨てた先には ほら
綺麗な綺麗な花が咲いてるんだ
根をしっかり伸ばして
太陽のように辺りを照らす
まるで君みたいだろう？
僕は君が帰ってきたときに
お茶が飲めるように
お湯でも沸かして待ってるよ

白黒

私の心は真っ黒で
黒に塗り潰されていて
貴方の純白の心が目に痛い

笑う度 泣く度 怒る度
貴方の綺麗な心は
黄も 青も 赤も
色を吸って色が変わる

黒を変えられるのは
白だけだから
だからお願い
貴方は白いままでいて

こころのうた

<http://p.booklog.jp/book/73652>

著者：じゅしん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jushin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73652>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73652>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ